

聖書日課 『からし種』 2022.8.21－8.28

<p>8月21日 (日) 創世記 28章</p>	<p>「ヤコブは眠りから覚めて言った。『まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった』(16節)。 主はいつもわたしたち一人ひとりの傍らにたたくみ、常に共に歩んでくださっている。そのことを知っているわたしたちだが、その伴いに気づくのは、なんと難しいことだろうか。</p>
<p>22日 (月) 創世記 29章</p>	<p>「レアは優しい目をしていたが、ラケルは顔も美しく、容姿も優れていた。…主は、レアが疎んじられているのを見て彼女の胎を開かれたが、ラケルには子供ができなかった」(17、31節)。主のまなざしはやさしく、わたしたちが見逃すようなところにも注がれる。そして、わたしたちの弱さと痛みに寄り添い、癒しのみ手を差し伸べてくださる。</p>
<p>23日 (火) 創世記 30章</p>	<p>「ヤコブは激しく怒って、言った。『わたしが神に代われるというのか。お前の胎に子供を宿らせないのは神御自身なのだ』(2節)。神のなさることは、時にわたしたちには理不尽としか思えない。神の深い思いや、はるか遠くを見通した慮(おもんばかり)を理解することはできない。そして自分に都合が良い！と思われる「人の知恵」に足をすくわれてしまう。</p>
<p>24日 (水) 創世記 31章</p>	<p>「わたしはお前たちをひどい目に遭わせることもできるが、夕べ、お前たちの父の神が、『ヤコブを一切非難せぬよう、よく心に留めておきなさい』とわたしにお告げになった」(29節)。他者の神を否定することなく、主の臨在を心に留めて、ヤコブの神に聞き従ったラバンのように、無用な争いではなく平和を求める者でありたい。</p>

聖書日課 『からし種』 2022.8.21-8.28

<p>25日 (木)</p> <p>創世記 32章</p>	<p>「ヤコブは非常に恐れ、思い悩んだ末、連れてきている人々を、羊、牛、らくだなどと共に二組に分けた」(8節)。</p> <p>神の祝福をどれほどいただいても、策を弄(ろう)したかつての自らの行いのために、兄エサウを恐れるヤコブの姿は、人間の弱さを見せつける。欠けだらけのわたしたちが、主の前に誠実に歩むことの難しさを思わされる。</p>
<p>26日 (金)</p> <p>創世記 33章</p>	<p>「エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いた」(4節)。</p> <p>自らの欠けに気づいたものが、自分に与えられた主の恵みの真の豊かさを知ることができるのではないだろうか。そしてまた、他者の欠けをも、赦してくださいと祈るものにされていくのではないか？</p>
<p>27日 (土)</p> <p>創世記 34章</p>	<p>「お互いに姻戚関係を結び、あなたがたの娘さんたちをわたしどもにくださり、わたしどもの娘を嫁にしてくださいませんか」(9節)。</p> <p>食料・経済危機の中、娘たちが家族のために結婚という名目で売られる状況は今も起こっている。虐待や暴力の被害も後を絶たない。神が良しとされた一人ひとりの尊厳を守るために私たちは何ができるのだろうか？</p>
<p>28日 (日)</p> <p>創世記 35章</p>	<p>「さあ…ベテルに上ろう。わたしはその地に苦難の時わたしに答え、旅の間わたしと共にいてくださった神のために祭壇を造る」(3節)。</p> <p>ベテルは、ヤコブが兄エサウから逃げて荒れ野で野宿した夜、「あなたがどこへ行こうとも守り、必ずこの地に連れ帰る」と主が約束された場所。苦難を通してこそ見えてくる主の慈しみと真実がある。この主を共に賛美していこう。</p>